

論文

ジャック・ロンドンの黄禍論—黄禍論の歴史に関わって

劉 鵬¹

Jack London's Theory of Yellow Peril, Referring to the History of the Yellow Peril

Peng LIU¹

Abstract

The challenge, issue, and problem of yellow peril still remains in the present world. President Trump is advocating "America first." The threat against China is expanding, so America has started a trade war. However, the time when the threat against China was the most prevalent in the common popular history of the United States was that of Jack London. And Jack London gave the impetus. Jack London wrote the essay "The Yellow Peril." But there is a big difference between American yellow peril and European yellow peril, and the yellow peril turned only to Japan or China.

This paper is analyzing the differences between American yellow peril and European yellow peril. And why Jack London became a race biased-writer. This cause was mainly because of his mother, his society and himself. As he understood China, London changed his racism against the Chinese. "The Yellow Peril" is from blind race bias of the threat against China. Because there is his constant trial of understanding, he could write "The Yellow Peril". When we see Jack London's last Chinese novel, we can find his understanding of the Chinese became quite deep. Therefore he could write about China fairly.

I suggest a lack of understanding is one of the causes of prejudice. When each one deepens his or her understanding, the race bias will become weak, just like the case of Jack London.

キーワード 黄禍論 中国脅威論 白人優位論 中国人移民 人種偏見

Keywords: Yellow peril, China's threat theory, Caucasian doctrine, Chinese immigrants, Racial bias

1. はじめに

近年中国が発展してきており、その経済面の影響力が世界中に大きく広がっている。世界の経済の発展、そして貿易を進めるため、共存共栄の意味を持つ大きな経済圏「一帯一路」¹⁾の政策が始まった。中国を中心にできた一帯一路経済圏に対しては、アメリカのポンペオ国務長官が、参加しているすべての国が「財務の罨」に陥るのではないかと言い出した。彼は例として、スリランカ・ハンバントタ港を九十九年間中国が自由に借用していることを挙げて説明した。

今の時代の新たな黄禍論が始まったかのように感じられる。今、中国の資金や技術などが世界各地、特に途上国に進出している最中で、中国ブームになっている時、

黄禍論のようなこの中国脅威論が再びこの世の中に蘇るのか。筆者はジャック・ロンドンの"The Yellow Peril"などの作品を分析しながら、黄禍論の歴史を辿って、さらに中国伝統思想についての考察を加え、この答えを探り当てたいと考えている。

2. 西欧世界の黄禍論の始まり

黄禍論は白人国家において現れた、黄色人種、主に日本と中国についての脅威論であり、1890年代後半にドイツ皇帝のヴィルヘルム2世が広めた寓意画「ヨーロッパの諸国民よ、諸君らの最も神聖な宝を守れ」²⁾によって世界に流布した。この論調は日清戦争を背景にしている。当時の中国は半殖民半封建社会に落ちていて、ヨー

¹ 891-0197 鹿児島市坂之上8-34-1 鹿児島国際大学大学院国際文化研究科博士後期課程

The International University of Kagoshima Graduate School Intercultural Studies Doctor Program, 8-34-1 Sakanoue, Kagoshima 891-0197, Japan
2019年5月24日受付、2019年7月18日採録

ヨーロッパ諸国は中国で各自の植民地を持ち、例えば、イギリスは香港³⁾、フランスは広州地区、ドイツは山東半島、ロシアは遼東半島などの植民地を持っていた。日清戦争が終わり、清王朝が負けて、日本がこれらのヨーロッパの植民地から自分たちの植民地を奪い取るのではないかと考えたため、日清戦争の講和条約に際してロシア、ドイツ、フランスの三国が行った三国干渉があったというわけだ。この際に黄禍論が生み出されて広がった。そして、1904年の日露戦争でロシアの植民地である遼東半島を日本が奪ったので、この論調はさらにヨーロッパの白人の中で定説になったのだろう。

黄禍論の始まりを見ると、ロシア、フランス、ドイツにおける黄禍論の対象は日本を中心としている。しかしながら、1904年にジャック・ロンドンが日露戦争中に日本軍の従軍記者として取材した時に書いた“The Yellow Peril”を読んで見ると、上述したと大きく食い違うところがあることがわかる。ロンドンの“The Yellow Peril”の主張は、中国は“Yellow Peril”、日本は“Brown Peril”である。日本は本当の“Yellow Peril”ではない。ただ日本がこの“Yellow Peril”の火を点けたに過ぎなくて、本当の“Yellow Peril”は中国であることが書いてある。

では何故同じ白人の国アメリカとフランスやドイツやロシアの間でこんな大きな食い違いが起こったのか。当然、その中の利害関係を考えなければいけない。日本とヨーロッパが争っていたのは中国での植民地をめぐることであった。アメリカは中国に植民地がなかったため、日本とアメリカの間にはあまり利害関係がなかった。そして、かつて匈奴⁴⁾を代表するアッティラ (Attila) やモンゴルを代表するチンギスハンの息子オゴデイがヨーロッパを制したことがあった。その中で多くのヨーロッパ人が犠牲になったので、ヨーロッパ諸国は当時の大和民族である日本がもしや匈奴やモンゴルのあとを追うのではないかと考えていただろう。アメリカにはこのような歴史がなかったし、一方で、中国人の移民労働者の問題がアメリカで広がったため、同じ白人社会にもかわらず、アメリカとヨーロッパの間に大きな違いが起きたと考えられる。

3. ヨーロッパ諸国と異なるアメリカ産の“Yellow Peril”、及びそのジャック・ロンドンへの影響

移民の国と言われているアメリカは世界中から移民を

受け入れたが、ロンドンが生きた時代の前後には、白人が主体のアメリカが歓迎しない人種があった。それは中国人と日本人である。その時代に何が起きたのか、遡って見てみたい。

3.1. 中国からアメリカへの移民

ゴールドラッシュと言えば、カリフォルニア州が初めて世界の視線を集めた出来事と見られていると同時に、中国からアメリカへの大規模的な移民の始まりの時期でもあった。多文化主義研究では全米的に最も名の知れた渡った学者の一人であるロナルド・タカキの著作『多文化社会アメリカの歴史—別の鏡に映して』の中には次のように書かれている。

カリフォルニアが併合された結果、アジアへ向かってアメリカが拡大しただけではなく、アメリカへ向かうアジア人の移住も始まった。

—中略—

もっとも若く、もっとも落ちつかない、そしてもっとも勇敢な中国人の多くは、ガムサアン、つまり「金の山」のことを知って村を離れ、アメリカへ向かった。

—中略—

外国人鉱夫税は、一千八百七十年の公民権法によって無効とされるまで有効であった、それまでにカリフォルニアは中国人から五百万ドルを取り上げており、これは州の歳入全体の二十五ないし五十%に当たる額であった。

一千八百六十年代には、カリフォルニアの鉱山で働いている中国人は二万四千人にのぼり、それはアメリカ全体の三分の二であった。(Ronald Takaki 富田訳 1995: 334-340)

つまり、ゴールドラッシュは中国からアメリカへの大規模的な移民の原因になったと見られるが、実は、アメリカの拡張による、人手不足の結果である。だから、最初アメリカは中国からの労働力を歓迎していた。中国人労働者は当時のカリフォルニア州の歳入全体の25から50%に当たるほどに貢献していたし、そして、アメリカの大陸横断鉄道建設⁵⁾の時に、再び思い出されたのは万里の長城をも造った中国人である。その後、アメリカにいる中国人労働者がもっと増えた。アメリカの人手不足を解決するため、更に、1868年に「米中天津条約追加協定」⁶⁾ができた。この協定によってアメリカにいる中国人に商業または永住の権利があることが示されてい

た。しかし、このようにアメリカと中国人労働者の相互の利益が生まれる状況は長くは続かなかった。若槻泰雄の『排日の歴史』の中にはこう書かれている。

他方、「天津条約追加協定」の翌六九年、東部と西部をつなぐ大陸横断鉄道は完成し、東部からの人口移動が激しくなったので、この頃から中国人労働者と白人労働者の摩擦は次第に重大化し始めた。低い賃金に甘んずる中国人移民は雇い主には喜ばれたが、新たに細部にたどりついた貧困なヨーロッパ人移住者とは正面から競合したからである（若槻泰雄 1972: 15）

大陸横断鉄道が完成し、大量な人口移動が起こった結果、カリフォルニアの労働力が過剰になってしまった。当時カリフォルニアに在住中の中国人労働者たちは用済みになった。遂に、アメリカは用済みになった中国人労働者を見捨てた。その真実はスタインベックの『怒りの葡萄』の中にも書かれている、資本家は賃金を低くするために全国から労働者をカリフォルニアに掻き集めてきた。そして、資本家と労働者の矛盾が表面化し、資本家による政府は労働者の怒りを中国人労働者に転化した。彼らは中国人労働者が彼らの仕事を奪ったと信じ、結果、カリフォルニアの中国人は白人資本家と白人労働者両方からの怒りを浴びせられた。カリフォルニアにいる中国人労働者に対する暴力事件も続々発生していた。遂に、1879年にはカリフォルニア州法により中国系移民は選挙権を剥奪され、1980年にはさらには中国人移民取締条約が成立し、また、その後一連の中国人移民排斥法等々により中国人は締め出されていった。アメリカにいる中国人労働者たちは権利をどんどん失ってしまったと同時に、これらの力が働いた結果、人種的な偏見や中国人脅威論が自然に生まれてきた。これらの中国人に対する不平等な待遇はロンドンが生きていた時代と重なって、お互いに影響し合っていた。

3.2. 初期のロンドンの中国人への偏見

ロンドンの前期の中国人もの小説から、彼が中国人に強い人種的偏見をもっていたことがわかる。特に最初の中国人作品 *Tales of the Fish Patrol* 中の二つの短編 “White and Yellow” と “Yellow Handkerchief” には中国人労働者に対する “The swart Mongols”, “Yellow face heathen”, “A yellow barbarian”, と呼ばれた呼び方が出てくる。しかし、これらの小説の中の中国人についての描写は次の通りである。

“This was met by a curding yell of rage. A big Chinaman, remarkably evil-looking, with his head swathed in a yellow silk handkerchief and face badly pock-marked.” (Jack London 1976: 19)

“Leading them came a big, muscular man, conspicuous for his pock-marked face and the yellow silk handkerchief swathed about his head.” (Jack London 1976: 216)

これらの描写は全く中国人の特徴を表していない上に、1909年に書いた “The Chinago” には中国人の心理描写が全くない。このようないい加減な描写とひどい呼び方から見ると、ロンドンが中国人のことを全く理解していないということのほかに、中国人に対する強い偏見や人種的な差別、中国人への軽視が見える。この時のロンドンは中国人に対して盲目的な偏見を持っていたと言えるだろう。ロンドンが中国人労働者に対して強い偏見を持つには、このように社会的な原因以外にも彼自身の原因もある。

4. ロンドンの中国人への人種偏見の始まりとその原因

ロンドンの小説を巡ってみると、彼の人種偏見はかなり早い時期から形成された。中国人への偏見も “White and Yellow” と “Yellow Handkerchief” より前から存在していた。ロンドンの人種偏見、特に中国人への人種偏見を形成した原因は簡単に纏めると三つがあると思う。

4.1. 母親からの影響

その一つ目は母親からの影響と言える。誰でも母親から生まれるし、母親は幼い頃に子供が一番影響されやすい人間であり、そして、その影響は子供の性格などを形成し、長い人生の中で影響を及ぼし続ける。一体ロンドンは母親からどんな影響を受けたのか、彼の経歴を語る本と彼の自伝的小説から探り出したいと考えている。キングマンの本には、こう書いてある。

ジャックの母親は、彼の人種（アングロ・サクロン系）以外はすべて劣っていると彼に教えた。（ラス・キングマン 辻井栄滋翻訳 1989: 35）

ロンドンの有名な自伝的小説「ジョン・バーリコーン」の中には、次のようなことが書いてあるが、他にも次のような言及がある。

当時はそこは、人の住まない未開の土地だったが、わが家は古いアメリカの家柄であって、隣人のように移住してきたアイルランド人やイタリア人などとは違うのだという母の自慢を、私はたびたび聞かされた。私たちの地域のどこを見まわしても、古いアメリカ人の一家といえはほかに一軒しかなかったのだ。(ジャック・ロンドン 辻井榮滋訳 1986: 19)

私の母には持論があった。まず、彼女の確たる主張によると、ブルーネットで黒い目をした人間はどんな連中も、人をだますというのだ。言うまでもなく母は、金髪色白碧眼(ブロード)であった。次に、黒い目のラテン民族は非常に神経質で、残忍であると思ひ込んでいた。再三、母の口から語られる世の中の不思議さや恐ろしさに聞きほれながら、たとえ故意でないにしても、もしちょっとでもイタリア人を怒らせたりしようものなら、きっと仕返しに背中をグザッとやられるよ、と言われるのを聞いたことがあった。“背中をグザッとやられる”—これは、母親特有の言い回しであった。(ジャック・ロンドン 辻井榮滋訳 1986: 22-23)

このようにロンドンの至近にいた母親から彼は幼い頭に人種偏見の種を播かれた。つまり、母親からの悪影響である。そのことはロンドン自身の筆からも、彼の経歴が一番詳しく書かれているラス・キングマンの本からも証明できるだろう。

4.2. 社会の中にある中国人に対する誹謗

その原因の二つ目は社会の中にある中国人に対する誹謗である。ノリス⁷⁾(Frank Norris)の「第三社会」にこんな話がある。サンフランシスコのチャイナ・タウンにあるレストランへお茶を飲みに入ったきり行方不明になってしまった白人女性の話であるが、彼女はずっと後にアヘン窟で麻薬患者になり中国人の奴隷になり果てているところを発見される、というものだ。当時のアメリカ社会にとっては、中国人の集落チャイナ・タウンは悪魔の巣窟であって、中国人はアメリカ白人を害し、お金をだまし取るなど悪いことばかりをやっている、と宣伝していた。ロンドンの自伝的小説『ジョン・バーリコーン』の中も次のような部分があった。この悪夢は彼の心に残って、酔っぱらうと夢に出て来ただろう。

7歳の時パーティでお酒(ワイン)を進められて、殺される恐れがあったので、飲みすぎて、酔っぱ

らった、夢の中で中国人が出た。“それはサンフランシスコの中国人街(Chinatown)の不正の巣窟に関する話だった。悪夢の中で、私は地深く無数のこうした巢をさまよひ、鍵のかかった鉄のドアの陰で苦しみ、無数に死を繰り返した。そして、私の父がこうした隠れた地下室のテーブルに着いて、中国人とばくちをやっているのにでくわすと、私はすっかり憤慨し、ひどい悪態をついた。ベッドに起き上がり、引き止めようとする手と戦いながら、大声張りあげて父をののしった。素朴な田舎を自由に走りまわっている子供が耳にするような、大人の口にする思いもよらない言葉、自分で喋っているのだった。それまでそんな悪罵は口にしたことはなかったのに、この時には、それがあらかぎりの声になって出てくるのだった。それも、地下に座って、長い髪と長い爪を生やした中国人とばくちをやっている父に対する悪罵であった。”(ジャック・ロンドン 1986: 28)。

アメリカ白人は中国人に対する敵意、憎しみ、警戒心などを煽るようにした。そして、このことは7歳のロンドンにも及んで彼の心の中に移り住んだだろう。

4.3. ロンドン自身の原因

その三つ目は彼の特別な出自である。ロンドンは一生成分の父親は誰なのか分からなかった。彼とウィリアム・H・チェイニーの手紙を調べてみると、ロndonは自分の父親はチェイニー教授ではないかと疑ったが、チェイニーはずっとそれを否定していたので、最後にはロンドンも諦めた。結局、ロンドンの父親は誰なのか、彼には分からないままだったのだ。また、ロンドンの母親はロンドンのことを自分にとって恥のような存在と考えていた。もし、彼女が妊娠しなかったら、ロndonを生まなかったら、自分の人生はうまく行っただろうとずっと考えていた。ロndonは両親からの愛情を全くもらえなかった。ロndonが子供の時、彼と親しい人は三人⁸⁾しかいなかった。この三人には一時的な関心や面倒を見ることができるが、両親からの愛と比較することはできないだろう。

ロndonが仕事のできる年齢になると、早くも新聞配達の仕事に就いた。それから、缶詰め工場、ボウリング場などいろいろな所で働いた。しかし、得た給料はほとんど母親のところに行った。その後、黒人の乳母ジェニーのところからお金を借りて、知り合いのところから船を買うことで、人生の冒険が始まったと言う。このよ

うに、両親から愛情を得られず、子供の時から牛馬の如くに働いたロンドンが身の頼り処がなかつたろう。社会に出て、アメリカ社会と母親の影響を受けて、自分が唯一自慢できる所は彼の血統であることに気づき。そして、自分が古いアメリカ人（アングロ・サクソン血統）であり、アメリカの主人たる血統であることが彼の身の頼り処になってしまった。こうして人種偏見の思想が彼の頭の中にさらに根深くなったのだろう。この三つの原因でロンドンの中国人への人種偏見が始まったと考えられる。このような偏見を持ったまま1904年に日露戦争を取材しに行ったが、5ヶ月の間に日本、朝鮮、中国に滞在したことで、日本人や朝鮮人や中国人へのイメージがどういうようになったのか。次の節で分析していきたいと思う。

5. “The Yellow Peril” 中の偏見の分析

ロンドンが“The Yellow Peril”の中に一体どんなことを書いたのか。Alex Kershawは*JACK LONDON A LIFE*の中にまとめた。

‘The Yellow Peril’, Jack warned that the ‘yellow’ Chinese and the ‘brown’ Japanese might one day join forces. ‘The menace to the western world,’ he wrote, ‘lies, not in the little brown man, but in the four hundred millions of yellow men should little brown man undertake their management.’ (Alex Kershaw 1997: 143)

Alexが纏めているように、中国人と日本人は同じ黄色人種なのにロンドンは二つの国を分けて考えている。つまり、中国は‘黄禍’ (Yellow Peril)、日本は‘茶禍’ (Brown Peril)である。白人種の脅威は当時ロシアを倒した小さい‘茶禍’ではなく、四億人の人口を持つ‘黄禍’の中国である。だからいつか日本が中国を目覚めさせたらどうなるだろうと考えていただろう。

ロンドンは、1904年1月23日に日本に到着してから同年の6月4日ごろに帰国するまでの5ヶ月余りの間に、日本と朝鮮と中国で取材をした。横浜に着いてから立ち去るまで二週間ぐらい日本にいた。鴨緑江を渡って中国に着いたのは5月1日で、それからアメリカに帰るまで一ヶ月余り中国にいた。あと残った時間は朝鮮半島で日本軍や朝鮮人と過ごしていた。ロンドンは、この期間中に見た朝鮮人、中国人、日本人について感じたことと、この三つの国が今後の世界、特に白人世界にどんな影響を与

えるかという予想を、“The Yellow Peril”の中に書き込んでいる。これから、朝鮮人、中国人、日本人についてロンドンが一体どう考えていたかについて一つずつ分析していきたいと思う。

5.1. “The Yellow Peril” 中の朝鮮人

まず朝鮮人については“The Yellow Peril”の中にこう書かれている：

They have splendid vigor and fine bodies, but they are accustomed to being beaten and robbed without protest or resistance by every chance foreigner who enters their country. (Jack London 1989: 271)

ロンドンは朝鮮人のことを無能なタイプの人間のように書いている。このような朝鮮人は白人に対する脅威にはならない。朝鮮人はロンドンの胸中では“peril”になる資格がなかったと言うことで、彼らは黄色人種ではあるが“Yellow Peril”にはならないのだ。

5.2. “The Yellow Peril” 中の中国人

かつてのロンドンは中国人に強い人種偏見を持っていたということが確認できた。しかもその偏見は盲目的な人種偏見であり、つまり中国人のこと全く理解してないにもかかわらず、中国人に対して強い人種偏見を持っていたのだ。しかしロンドンは日露戦争を取材する機会を使って中国に一ヶ月ぐらい滞在した。ロンドンの観察を通じて、この1ヶ月間で彼が中国人や中国の事をどのぐらい理解できたのか、そして、中国人に対する彼の偏見にどのような変化が起きたのだから。ロンドンは“The Yellow Peril”の中で中国人についてこう書いている。

The Korean is the perfect type of inefficiency-of utter worthlessness. The Chinese is the perfect type of industry. For sheer work no worker in the world can compare with him. Work is the breath of his nostrils. It is his solution of existence. It is to him what wandering and fighting in far lands and spiritual adventure have been to other peoples ... The Chinese is no coward ... Here we have the Chinese, four hundred millions of him, occupying a vast land of immense natural resources-resources of a twentieth century age, of a machine age; resources of coal and iron, which are the backbone of commercial civilization. He is an indefatigable worker. He is not dead to new ideas, new methods, new systems. Under a capable management he

can be made to do anything. Truly would he of himself constitute the much-heralded Yellow Peril were it not for his government, is set, crystallized. (Jack London 1989: 274-278)

いよいよロンドンが中国人の良いところに気づいたのだろう。すなわち、中国人は不屈の労働者であり、そして、商業文明を持ち、新しい考えや方法やシステムに無関心ではないのだ。この上に、中国は4億人の莫大な人口と莫大な天然資源（石炭と鉄）を持っている。しかしながら、これらの中国人の優れた点はロンドンの中国人についての印象を好感に変えることはなかった。逆に、彼は中国に脅威を感じた。ロンドンの中国脅威論が発生した原因には、もちろん当時の黄禍論の台頭と彼の従来の考えの関係も無視できないが、一方、彼の中国への誤解や理解不足も深く関係していただろう。白人種と黄色人種の根本的な違いは宗教だと思う。特に中国の宗教は白人にとって理解し難いものである。ロンドンと同じ時代に、日本で知れ渡っている新渡戸稲造が名作『武士道』を書いた理由をめぐっては彼自身がこう書いている：

ラヴレ氏と散歩をしていると、宗教の話題になった。その高名な教授は「つまり、日本の学校では宗教教育を行っていないということですか?」と尋ねてきた。私が、行っていないと返事をすると、ラヴレ氏は驚きのあまり突然立ちとまり、容易には忘れがたい声で、「宗教がない!それでは、どのようにして道德教育を受けるのですか?」と繰り返した。(新渡戸稲造 樋口健一郎等訳 2017: 18)

このように宗教上や道德上や思想などの相違があって、高名な教授でも理解不能である。ロンドンの時代は言うまでもなく、今でもお互いに十分理解し合っているとは言えないだろう。日本にいるドイツ人の僧侶ケネル無方は白人の宗教についてこう語っている：

ドイツのキリスト教徒は生まれてすぐの赤ちゃんのときに、洗礼を受けるのが一般的だ。幼児の洗礼は、当然本人の意思で受けたものではない。～ ドイツ子供たち14歳になるまで親の宗教に準じて、学校の宗教の授業を受ける。カトリックとプロテスタントでは教えが違っているので、クラスも別々に分かれて授業が行われる。そして14歳になると、自分がどの宗教や宗派に属

するかを選択する。または、無宗教であることを選択する。～ 無宗教であることを選んだ人は、宗教の授業の代わりに、道德を学ぶことになっている。～ 神様の存在を否定し、無宗教で生きていくと14歳で選択することは、とても勇気がいることだ。同時に、神様は存在しないという頑なな信仰でもあるから、「無神論」という名の宗教とも言える。このように、ドイツでは学校教育において、子供たちは宗教について真剣に考えざるを得ない。(ネルケ無方 2014: 24-25)

「無神論」という名の宗教とも言える」という部分は私たち東洋人にはどうしても理解しにくいだろう。やはり、白人種と黄色人種の一番大きな差異は宗教上の差異に違いない。つまり、思想や信仰や道德の違いだとも言える。詳しく言うと、白人種の宗教は基本的に一神教となっている。ユダヤ教といい、キリスト教といい、そしてイスラム教といい、系統は一緒とも言える。白人は神が存在していると固く信じている、神は絶対的な存在と考え、神の存在は心の頼り所と考えている。そして、彼らの道德も宗教から得たものである。宗教がないと生きていけないだろう。しかし、中国では違う。

中国人の道德は人間の基本的な感情と自然の法則に基づいて、孔子や孟子を代表とする儒家、そして、老子や荘子を代表とする道家の聖人の教えから得たものである。孔子の残した言葉でできた本『論語』には、「子、怪・力・乱・神を語らず」と言う言葉がある。即ち、孔子は神のことを信じていないと言えるだろう。中国人の道德の中に宗教という存在はないと言える。存在しているのは祖先への崇拜である。森鷗外は『黄禍論梗概』にこのように書いた。

論者は支那には宗教が無いと云ふ説だから～支那には祭典 (RITUR) が有って、天を祭ったり、祖先を祭ったりする。天も人格ある神ではない、それ故 (WUTTKE) と云ふ人の説に従って、支那には宗教がないと云ふ方が正しい。(森鷗外 1902: 35-36)

森鷗外の言う通り、中国には宗教がない。あるのは祖先崇拜である。中国人が一番大事しているのは家、いわゆる家族のことである。中国の道德基本“五倫”¹⁰⁾の前者の三つは家族の事を言っている。即ち父子、兄弟、夫婦の関係である。祖先崇拜と言えば、私たちは祖先の血を受けてきて、もっと正しく言うと祖先のDNAを継承

してきて、祖先への尊敬、感謝の念を持ち、そして受けて来た名字から人格や外貌などに至るまで謝意を持って祭って来たと思う。従って、親孝行は中国人として一番基本的な道徳である。これは白人と中国人の一番の差異だと考える。このように根本的な差異が存在しているので、お互いを理解するのはなかなか難しいと思う。従って遂には、中国人脅威論の道に導かれただろう。

5.3. “The Yellow Peril”の中の日本人

ロンドンが日本軍の従軍記者として日露戦争取材していたので、多くの時間を日本軍と一緒に過ごしていた。“If Japan Wakens China”の中では、ロンドンは、長年日本に住み、日本人の妻をもらって日本の国籍までとった Lafcadio Hearn より自分の方が日本のことに詳しいと書いている。ロンドンに“Brown Peril”と言われた日本人については、ロンドンの“The Yellow Peril”の中にも、次のように日本人についての彼の考えが載っている：

From the West he has borrowed all our material achievement and passed our ethical achievement by. Our engines of production and destruction he has made his. ~ A marvelous imitator truly, but imitating us only in things material. Things spiritual cannot be imitated, they must be felt and lived, woven into the very fabric of life, and here the Japanese fails.

—中略—

This must not be taken to mean that the Japanese is without soul. But it serves to illustrate the enormous difference between their souls and this woman's soul. There was no feel, no speech, no recognition. This Western soul did not dream that the Eastern soul existed, it was so different, so totally different.

—中略—

Religion, as a battle for the right in our sense of right, as a yearning and a strife for spiritual good and purity, is unknown to Japanese. Measured by what religion means to us, the Japanese is a race without religion. Yet it has a religion, and who shall say that it is not as great a religion as ours, nor as efficacious?

—中略—

The religion of Japan is practically a worship of the State itself. Patriotism is the expression of this worship. The Japanese mind does not split hairs as to whether the

Emperor is Heaven incarnate or the State incarnate. So far as the Japanese are concerned, the Emperor is Heaven lives, is himself deity. The Emperor is the object to live for and to die for. The Japanese is not an individualist. He has developed national consciousness instead of moral consciousness. (Jack London 1989: 283-288)

“The Yellow Peril”の中の日本人についての考えを見ると、ロンドンが理解しているのは、日本の神道である。当時、日本は軍国主義の道を歩み始めた、しかも、ロンドンと一緒にいたのは日本軍で、一部の特別な日本人だ。彼が見たのはほんの一部の日本思想で、しかも、その思想は軍国主義という極端なものである。確かに、その思想はその後日本でさらに拡大されていき、遂に、一時軍国主義は日本をリードしたが、しかし、それは日本思想の全てだと考えたら間違いだろう。Lafcadio Hearn が日本で細やかな日々を過ごしてきて感じたことの方が全面的だと思う。ロンドンが日本の軍国主義だけを理解したとしても、日本のことに詳しいとまではいえないだろう。

日本の宗教の核は愛国心である。それには正義などないとロンドンは主張している。ロンドンは日本思想を強く否定していた。こうなった原因については辻井栄滋がこう言っている。

日本に限った場合、やはりロンドンの日本人に対する悪感情をも指摘しておかねばならない…日本国内での足留め、検閲、あるいは逮捕事件に加えて、渡鮮後、渡満後においても日本軍さまざまな規則による足留め、拘引等々は彼の苛立ちを助長するばかりだった。(辻井栄滋 2001: 32)

このような原因があつて、日本のことを嫌いになってしまい、ロンドンは、“The Yellow Peril”の中でそうした自分の感情を過激に表現したのだろう。

5.4. “The Yellow Peril”を書いた時のロンドン

“The Yellow Peril”を読む時には、二箇所に関心があると思う。その一つめは、これらの宗教の話には中国の思想については全く触れられていないと言うことだ。主に書いたのは、アメリカなど白人国家がキリスト教による正義をかかげて行なった侵略のことである。そして、日本の宗教の核は愛国心である。それには正義などないとロンドンは主張している。“The Yellow Peril”を

テーマにする時に、なぜ“Yellow Peril”である中国の思想や宗教のことを書かなかっただろうか。なぜ彼が書いたのは“Brown Peril”である日本思想と白人のキリスト教だけだったのか。まず、考えられるのは、当時ロンドンが中国思想をあまり理解していなかったからだ。“The Yellow Peril”の中には中国人の行動だけが書かれていて、心理的なものには全く触れられていないことも証明できるだろう。“The Yellow Peril”の中にロンドンが唯一引用した文は新渡戸稲造の『武士道』からの一節である。『武士道』には、日本の思想は中国の儒家思想に強い影響を受けていると書いてある。特に、孔子や孟子そして王陽明、儒家思想中の聖人の言葉や考えを例で挙げているのだ。『武士道』を読んだロンドンが日本と中国の思想は近いものだと考えていた可能性もあるだろう。だから、東洋思想の代表として、彼がある程度まで理解していた日本思想や宗教だけ書いたのだろう。しかし、中国と日本の思想⁹⁾には近い所がありながら、大きな違いもある。どのみち、当時のロンドンが中国思想を理解していなかったことは間違いないだろう。

二つめは、まず、“The Yellow Peril”の中のこの文章を読んで見よう。

Back of our own great race adventure, back of our robberies by sea and land, our lusts and violences and all the evil things we have done, there is a certain integrity, a sternness of conscience, a melancholy responsibility of life, a sympathy and comradeship and warm human feel, which is ours, indubitably ours, and which we cannot teach logarithms or the trajectory of projectiles. ~ The colossal fact of our history is that we have made the religion of Jesus Christ our religion. No matter how dark in error and deed, ours has been a history of spiritual struggle and endeavor. We are preeminently a religious race, which is another way of saying that we are a right-seeking race. (Jack London 1989: 285)

ロンドンはキリスト教の正義を主張していたのだ。キリスト教を信じている白人は、間違っても、悪いことをしても、侵略をしても、キリスト教を信じているから彼らには正義があると主張したのだと解釈できる。『アメリカ文学作家作品事典』の中にはロンドンについて次のような評価がある。ロンドンはいろいろな思想の影響を受けたと言っているのである。彼には次のような一面も

あるのだ。

人種差別主義者、ファシスト、社会ダーウィニズムの信奉者としてロンドン… (D.L.Kirkpatrick (編) 1991: 799)

確かに、ロンドンの主張を見ると、この時のロンドンはまるで極右のようでもある。ファシストと言っても言い過ぎではないくらいだ。

ロンドンが見た事件として、ロンドンが取材していた時のもう一つの出来事を見逃してはならない。Jack London Reportsの中に次の文章が見られる：

“And there were white men in there ... many white men. I caught myself gasping. A choking sensation was in my throat. There men were my kind. I found myself suddenly and sharply aware that I was an alien ... And I felt myself strangely ... felt that my place was there inside with them in their captivity, rather than outside in freedom amongst aliens.” (Jack London 1970: 106)

5月1日ロンドンが中国の安東で目にしたものは、日本軍に捕まったロシア捕虜である。ロシア人とロンドンが同じ白人であることで、ロシア人捕虜をみた時に彼は一時呼吸困難になってしまうくらいダメージを受けた。そのことにより一層日本人のことを嫌いになって、憎悪の感情がますます強まっていっただろう。これらが原因で、“The Yellow Peril”が生まれたとも考えられる。しかし、時が立つと、日本人や中国人に対する理解が深くなるに従って、ロンドンの偏見が緩和したり、最後には、中国人や日本人に対する偏見にかなりの変化が見えてくるのである。

6. ロンドンの人種偏見の弱まり

現実ではロンドンが言ったような黄禍論（中国脅威論）は存在しなかった。存在したことがないのだ。中国の名物である万里の長城は防衛的な目的のために築かれたものである。2019年3月8日香港の『华南早報』¹¹⁾によると、マレーシア大統領（Mahathir）は、中国とマレーシアは2000年以上の関係を持っているが、中国はマレーシアを侵略したことがないと言った。逆に、ヨーロッパ人は1509年に東南アジアに辿り着き、二年も経たずにマレーシアを占領した。今回各国が中国からの借金による財務

危機に陥ることについては、マレーシア大統領は「国家にはみんな主権があり、外国の金を貸し付けるかを決める権利がある。中国の本質は非常に友好的な商人である。中国は機会を見つけて、他の国の資金が届いていない所に投資する。各国は中国の資金を受け入れるとどんな影響が出てくるか考えた上で、判断している」と言った。日本の文豪森鷗外も黄禍論の真実を鋭く指摘している、彼の『黄禍論梗概』の中には次のように述べられている。

黄禍と云ふ語は白人種と黄色人種との争闘から、新たに生まれて来た語で、白人の側で黄色人に對して抱いて居る感情を表して居るのであります。(森鷗外 1902: 2)

森鷗外が言っているような黄禍論は白人優位主義である。しかし、ロンドンの人種偏見は弱まっている。“The Yellow Peril”の5年後に書いたエッセイ“If Japan Wakens China”では、ロンドンの基本思想はあまり変わらなかったが、述べ方が柔らかくなり、かなり冷静になっているという傾向がある。そして、ロンドンの最後の中国もの作品“The Tears of Ah Kim”の内容に注目したいと思う。主人公の中国人“Ah Kim”はハワイで成功した中国人商人である。彼の貯金では一人しかハワイに迎えることができないということで、彼の好みの中国人女性よりは長年彼を叩いてきた母親の方を中国からハワイに迎えた。そして、母親の意思に反しないように、母親が生きているうちは好きな女性と結婚しなかった。最後に母親が彼を叩いていた時、唯一涙を流した原因について彼は説明している。

つまり母親の力が弱くなって来たのを感じて、母親が年老いたことに気づき、自然に涙が出て来たのだ。ロンドンが書きたかったのは中国人の親孝行についてだと理解できる。宗教や道徳に関わる白人と中国人の一番の差異についてロンドンが理解できるようになったということだ。従って、“The Tears of Ah Kim”にはあまり偏見などは出て来ていない。

本研究によって、ジャック・ロンドンが“The Yellow Peril”を書いた時には、中国人と日本人についての理解は、以前のロンドンより進歩していて、新しい認識も獲得した。しかし、中国についての理解はまだ表面だけに留まっていて、日本についての理解は偏り、ロンドンの考えはただの偏見からさらに脅威論や憎悪の感情になっ

てしまった。とはいえ、ロンドンは重要な一歩を踏み出したと考えられる。この進歩があって、ロンドンが中国と日本に興味を持って研究し続ける。そして、その後の“The Tears of Ah Kim”や“Cherry”など偏見があまりない作品が書けたと思う。この進歩がないと、ロンドンはずっと中国人と日本人に偏見を持ちつづけ、“The Tears of Ah Kim”や“Cherry”のような作品を書けなかっただろう。“The Yellow Peril”はロンドンが中国人と日本人についての理解を深めていくスタートと考えたほうがいいと思われる。ここから一つの国の思想の理解まではかなり遠いけれど、生まれるべくして生まれた作品だと考える。“The Yellow Peril”は単なる人種偏見の作品ではないのだ。ジャック・ロンドンの人生の流れの中でも価値ある作品だと考えている。

7. 終わりに

現在アメリカのトランプ大統領がアメリカ・ファーストを提唱している。そして、中国とアメリカの貿易戦争が勃発している。ロンドンの時代から今まで100年以上たっても、アメリカではこのような自己優位主義が変わらないのである。自国中心の考えを捨てて、多元的社会的ことを考えて、そして、中国とアメリカも同じようにお互いを理解したら、誤解や偏見や矛盾などをもっと減らすことができるだろう。強い人種偏見を持つジャック・ロンドンでさえ中国人を理解しつつあって、それに従って人種偏見が弱くなっていたので、情報が容易に手に入る今の時代においてはより深く理解し合えるだろう。

注

- 1) 一带一路というのはシルクロード経済ベルトと21世紀海洋シルクロードのことだ。2014年11月10日に中華人民共和国北京市で開催されたアジア太平洋経済協力首脳会議で、習近平総書記が提唱した経済圏構想である。
- 2) この絵の流布は黄禍論の広がり大きく関係している。
- 3) 1997年7月1日に中国に帰還した。一国両制によると主権が中国にあり、香港は50年間資本主義制度を維持できる。
- 4) 匈奴は中国北方にある遊牧民族の一つである。万里の長城は遊牧民族の侵略を防ぐために建てられたものである。
- 5) 特に西からの建設には大量の中国人労働者を雇った。
- 6) 第二次アヘン戦争の追加協定である、全八条のうち第5条には、アメリカにいる中国人に商業または永住の権利があることが示されていた。
- 7) ノリス (Frank Norris) 1870-1902、アメリカの小説家、ロンドンの友人でもある。

- 8) この三人は、ジャック・ロンドンの義父ジョン・ロンドン、義姉フローラ、乳母ジェニーを指している。
- 9) 中国を支配している思想は道家、儒家と仏教で、日本を支配している思想は神道、儒家と仏教である。儒家と仏教を共有しているが実は日本の国民性に適応するために大きな変化が起きている。
- 10) 五倫は儒家における五つの道德法則である。父子の親、君臣の義、夫婦の別、兄弟（長幼）の序、朋友の信のことである。
- 11) この記事のテーマは“T'D SIDE WITH RICH CHINA OVER FICKLE US: MALAYSIA'S MAHATHIR MOHAMAD” で、記者は、BHAVAN JAIPRAGAS である。

参考文献

- Alex Kershaw (1997). *JACK LONDON A LIFE* London: Harper Collins Publishers.
- D.L.Kirkpatrick (編) (青山みゆきほか訳) (1991). 『アメリカ文化作家作品事典』東京：本の友社.
- 汗青 (2015). 『欧亚颶風 - 匈奴王阿提拉』北京：時事出版社.
- Jack London (1919) *TABLE OF CONTENTS* INTERNATIONAL MAGAZINE
- Jack London (1970). *Jack London Reports* NEW YORK: GARDEN CITY.
- Jack London (1976). *TALES OF THE FISH PATROL* NEW YORK: PLAINVIEW.
- Jack London. (辻井栄滋訳) (1986). 『ジョン・バーリコーン』東京：社会思想社
- Jack London (ラス・キングマン、辻井栄滋) (編) (1989) *THE WORKS OF JACK LONDON* TOKYO: HON-NO-TOMOSHA.
- Jack London. (辻井栄滋、芳川敏博訳) (2011). 『ジャック・ロンドン多人種もの傑作短篇選』東京：文明書房.
- 森鷗外 (1902). 『黄禍論梗概』東京：春陽堂.
- ネルケ無方 (2014). 『日本人に「宗教」は要らない』東京：KK ベストセラーズ.
- 新渡戸稲造. (樋口健一郎、国分舞訳) (2017). 『武士道 BUSHIDO: The Soul of Japan』東京：IBC パブリッシング株式会社.
- ラス・キングマン. (辻井栄滋訳) (1989). 『地球を駆けぬけたカリフォルニア作家—写真版ジャック・ロンドンの生涯』東京：本の友社.
- Ronald Takaki. (富田 虎男監訳) (1995). 『多文化社会アメリカの歴史—別の鏡に映して』東京：明石書店.
- Rune Grousset. (何滄翻译) (2013). 『草原帝国』重庆：重庆出版社.
- 辻井栄滋 (2001). 『地球的作家ジャック・ロンドンを読み解く—大自然と人間—太古・現在・未来』東京：丹精社.
- 若槻泰雄 (1972). 『排日の歴史』東京：中央公論社.